

史遊会通信

NO. 178
平成21年
7月11日
発行

事務局
03--3712
0651
下山田方

六月講演

樂聖船村徹先生讃歌

鯨 游海

1 誕生

日光山麓神童誕
一泣虚爲千兩眞
終日殷殷吹喇叭
誰知樂聖風雛春

日光山麓に神童誕まれ
「一泣きの虚」もて「千兩の眞」と為す
終日殷々と喇叭を吹く
誰か知らむ樂聖の風雛の春を

2 青雲之志

國破春巡世相荒
名勝古蹟救家郷
少年彈奏歌曲想
音樂之途志愈昂

國破れ春巡り世相荒ぶも
名勝古蹟家郷を救ひたり
少年彈奏しては曲想に耽り
音樂の途志いよいよ昂し

3 上京入學

仰雲負笈上京師
忽得同袍同韻兒
君綴歌詞吾作曲
四時切嗟琢磨姿

雲を仰ぎ笈を負い京師に上る
忽ち得たり同袍同韻の兒
君は歌詞を綴れ吾れ曲を作らむ
四時切嗟琢磨する姿

例会のお知らせ

◎ 7月例会

日時 平成21年7月22日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

座談会 「史遊」を読んで

司会 森下征二氏

書記 中山高央氏

自由執筆は島津隆子・相原精次

森下征二の諸氏。締切り8月15日

◎ 8月休会

◎ 9月例会

日時 平成21年9月30日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 鍋屋次郎氏

テーマ 未定

自由執筆は平山善之・中込勝則

瀧澤中の諸氏。

締切り9月30日

- 4 管鮑之交
 一期一會姓高野
 名謂公男詩鬼才
 青影紅燈狹斜巷
 抱琴糊口與徘徊
 琴を抱き口を糊せむと与に徘徊す
- 5 苦節修業秋
 漸知美酒又多情
 相喚飛泡復五更
 合作演歌已千曲
 如何未聞巷流行
 漸やく知る美酒も又多情なるを
 相喚ひ泡を飛ばして復た五更
 合作の演歌已に千曲なるも
 如何せむ未だ巷に流行するを聞かず
- 6 別離一本杉
 突如席卷調非凡
 題別離之一本杉
 春日八郎聲朗朗
 滂沱我淚濕青衫
 突如席卷す調ぞ非凡なる
 題や「別れの一本杉」
 春日八郎声朗々
 滂沱たる我が涙青衫を湿ほせり
- 7 痛恨鎮魂歌
 昨夜九州風靡滿
 今朝痛恨鎮魂歌
 水魚交友昇天報
 高野公男我大河
 昨夜九州を風靡せし満
 今朝痛恨の鎮魂歌
 水魚の交友昇天の報せ
 高野公男は我が大河なるに
- 8 酒與淚與作曲
 綠酒紅燈悲不銷
 千行落淚轉凄寥
 如狂一向五線譜
 名曲何多膾炙調
 綠酒紅燈悲みは銷へず
 千行の落涙うたた凄寥たり
 狂へる如く一たび五線譜に向かへば
 名曲の何ぞ多かる膾炙の調への
- 9 流行作曲家
 島倉東京哉媽耶
 美空舟溜也阿爺
 古関古賀何程者
 今我流行作曲家
 島倉の「東京だよおっ媽さん」
 美空の「舟溜だよお爺っつあん」
 古関古賀何程の者ぞ
 今我れ流行の作曲家
- 10 哀愁波止場
 聲動梁塵餘韻香
 詩操嫋嫋響玲琅
 是正天粟歌唱賞
 名曲哀愁波止場
 声は梁塵を動かし余韻香んばし
 詩操嫋々として響き玲琅たり
 是れ正に天粟の歌唱賞
 名曲ぞ「哀愁波止場」は
- 11 泰西留學
 猿飛佐助沸江湖
 銀幕音聲下命吾
 旋律幽玄金賞譽
 泰西留學就鴻圖
 「猿飛佐助」江湖を沸かす
 銀幕の音聲吾れに下命さる
 旋律幽玄にして金賞の譽れ
 泰西留學の鴻圖に就く
- 12 王將
 吉報雁來狼狽歸
 吟聲流濁却揮威
 銅鑼亂打祝勝宴
 八百八橋駒若飛
 吉報の雁来たれば狼狽して帰る
 吟声流濁して却って威を揮るへり
 銅鑼亂れ打つ祝勝の宴
 八百八橋駒飛ぶが若し
- 13 泪船
 北島三郎難美聲
 路傍歌手未知情
 泪船何得新人賞
 伯樂勿忘星野名
 北島三郎美声と雖も
 路傍の歌手未だ情を知らず
 「泪船」何ぞ得たるや新人賞を
 伯樂を忘るる勿れ星野の名を

14 辭社獲得伴侶

千萬無量辭社春
生涯伴侶娶佳嬪
此時徒弟既幾十
再爲演歌巡禮身

15 兄弟船

待望俊才謳聲肩
詩魂乘曲愈渾然
咆哮對海男浪漫
鳥羽一郎兄弟船

16 女囚之合唱

嚴冬猛夏訪刑徒
慰問巡回我壯圖
栃木女囚滿堂寂
一彈流淚不歌無

17 春宵一會

戰友稻垣還不遷
櫻花靖國與兄眠
春宵邂逅亦如夢
和氣一團遺族縁

18 亂髮

四海君臨五十年
獨聽亂髮想綿綿
歌非聲可以心頌
雲雀舞空消蒼天

19 二宮金次郎

忽聞新曲妙音符
農聖尊翁艱難途
切切嘈嘈無不醉
美聲正是大金吾

20 文化功勞賞

幾千傑作榮光
授賞燦然文化賞
邁進煌煌歌謠道
猶期樂界更飛翔

(参考文献)

船村徹『歌は心でうたうもの』日本経済新聞社
船村徹『ニッポンよニッポン人よ』フーガブックス

先生は平成二十年度文化功勞者に選定され褒賞の榮に浴された。



自由執筆

豊臣恩顧の筋目を通して

処分された、上杉景勝

千坂 精一

慶長五年（一六〇〇）九月二十九日、會津の上杉景勝の許に伏見留守居役から石田三成の豊臣軍が美濃關ヶ原で徳川家康軍に敗れたとの急報が届いた。

景勝は、（東北の關ヶ原）といわれている最上義光との戦いで山形領内へ攻め入り、畑谷城（東村山郡山辺町畑谷）を陥とし、上山城（上市市）を抜いて長谷堂城（山形市長谷堂）を攻撃している直江兼續に、ただちに撤退を命じた。

兼續は、三十日に長谷堂城へ猛攻を加えておいて、十月朔日未明にさつと軍を退くと會津へ帰陣した。

非常呼集で若松城に集合した諸將との評定の席で景勝は、兼續や甘糟景繼らの主戦論を斥けて和睦を決断した。

伏見留守居役からの上方情報で、時代の流れに抗する虚しさを感じたからであった。

景勝は、十二月下旬に本庄繁長を和睦の使者に立てて大坂へ遣わした。

年が明けた正月中旬、家康は大坂城西の丸で（上杉景勝処分）の評定をひらいた。席上、家康の二男結城秀康が口火を切つて意見を述べた。

「上杉景勝の謀叛は、かならずしも定かではありません。去年九月の關ヶ原の役においても降服してきた大名たちを赦された例があるではありませんか。いわんや上杉はわれらに手向かい合戦を仕掛けて来たわけではありません。ことに上杉は鎌倉以来の名門であり、当主景勝は太閤以来の筋目を通した律義者にござります。なにがしかの処罰はやむを得ないにしても、家名だけは存続させてやりとうござります」

そう熱っぽく景勝を擁護したので、徳川の重臣たちも頷き、列席の諸侯も同意した。秀康は、家康が小山から引き返すとき、上杉への抑えを命ぜられて蒲生秀行とともに宇都宮に残留させられた。

血気に逸る秀康は、功を焦って景勝に、「目のまえで相手に反転されてしまえばご退屈でござろう。われらと一戦交えようではござらぬか」と囁いた。

景勝は、家康が踵を返したとき、兼續に追撃して江戸を占拠することをすすめられ

たが、承知せず、

「この次第はともあれ、相手の苦境に乗ずるは上杉の軍法ではない。仕掛けてきた相手が退いたのだから、こちらも引き揚げるのが道理である」

と兼續の血氣を抑えたが、このときも、「内府父子が西上してしまい、われもまた馬上で戦場を駆け巡らぬ日がつづいていて、骨肉の生ずるを覚える。しかしながら、亡父謙信以来他人の空き巢を狙うは法度にござれば、なにとぞご懸念なく」

と秀康をはぐらかした。

秀康は、手薄を衝かぬ景勝の正々堂々とした爽やかな態度に感服していたのだ。

景勝は、七月朔日に直江兼續とともに會津を発つて上洛し、伏見屋敷に入った。

そして、二十六日に大坂城に伺候して秀頼のご機嫌を窺ったあと、西の丸で家康と面会して恭順の意を述べた。

八月十六日に景勝主従は、本多正信から「米澤三十万石に減封」を申し渡された。

伏見屋敷へ戻った景勝は、兼續を、「武命の衰運今に於ては驚くべきに非ず」と有め、十月二十八日米澤へ入部した。

自由執筆
イタリヤ・歴史のアナロジ

新井 宏

イタリヤ・ルネッサンス期の状況は日本の戦国時代に似ている。ローマ法王庁と海の強国ヴェネチア、そして北にミラノ、中央にフィレンツェ、南にナポリ王国を配置し、その合間に小国が乱立していた。

そのためであろうか、登場人物も日本と似ている。例えば政略結婚を繰り返した美女ルクレッツァ・ボルジアはまさに「お市の方」である。

彼女の兄のチェーザレ・ボルジアは織田信長であった。マキユアベリの『君主論』の主人公で、塩野七生が「優雅なる冷酷」と評した教会軍総司令官。彼は女傑カテリーナ・スフォルツァが治めるイーモラやフォルリを一四九九年に陥としてから、わずか三年間でウルビーノやサンマリノを降伏させ、イタリヤ中央部に一大勢力を形成した。父が法王アレクサンデル六世である。

妹のルクレッツァ・ボルジアは、兄や父との近親相姦が噂されたほどの美女で、最初はミラノ公イル・モーロの甥と結婚した

が、離婚させられ、次には、ナポリ王の子アルフォンソと結婚、そのアルフォンソも兄チェーザレに暗殺され、更にフェラーラ公アルフォンソ一世と政略結婚させられた。「お市の方」は、夫の浅井長政が兄の信長に滅ぼされ、のちに柴田勝家に嫁いたが、秀吉に攻められて勝家に殉じた。

チェーザレ・ボルジアと共に、戦国ルネッサンス期を飾るミラノ公、通称イル・モーロは一四五〇年にミラノ公の娘と結婚してヴィスコンティ家を襲奪、スフォルツァ家を起した傭兵隊長。素浪人上がりと言われる北条早雲が葦山城主の一人娘に婿入りして北条姓を手に入れたのと似ている。そう言えば、彼の領地ロンバルディアは、ちょうど関東を治めた北条氏の規模である。

通称のイル・モーロは色黒の意。松永弾正のような策略家で、謀術と比類なき闘争心で陰謀渦巻くルネッサンス期を生きた男、一方で背徳的な悪の顔をもちながら、他方で芸術と学問を愛した複雑で魅力あふれるこの男はダ・ビンチのバトロンでもあった。妻のベアトリーチェ・デステは、美人であったが若くして亡くなった。

ベアトリーチェの姉、ルネッサンスの華イザベラ・デステはフェラーラのエステ家

の出身でマントヴァ侯夫人、一時期モナリザのモデルと言われたほどで、才色兼備高い教養によって書簡外交を繰りひろげ、後世に多くの史料を残した。

その弟のフェラーラ公アルフォンソ一世と政略再婚させられたのが、ルクレッツァ・ボルジアである。フェラーラは大砲に秀でていたので、チェーザレ・ボルジアもこれを活用して勢力圏を拡大した。信長が鉄砲を活用したのに似ている。

チェーザレ・ボルジアに屈服した女傑カテリーナ・スフォルツァはイル・モーロの姪である。反乱軍に取り囲まれ子供を人質に取られながらも、城館の屋上に立つてスカートを捲り上げ「子どもなどここからいくらでも出てくる」と喚阿を切った逸話を持つ。チェーザレに敗れた日、一室に閉じ込められ、夜を共にしたと伝えられる。

彼女の子、ジョヴァンニ・デ・メディチは有名な黒旗隊の傭兵隊長として活躍。メディチ家の再興を果たした初代トスカーナ大公コジモ一世は彼の子である。

歴史における比喩(アナロジ)は、不案内な歴史になじむひとつの知恵であると思う。

自由執筆
異聞『松島瑞巖寺』

高橋 由貴彦

日本三景の一つに松島が上げられている。松島と言えば『瑞巖寺』を外すわけにはいかない。

今から約四百年前に伊達政宗は支倉常長を使者としてローマに遣わしたが、案内役としてサンフランシスコ会の宣教師ルイス・ソテロが同道した。むしろ彼が使節の発案者であった。

その使節のいきさつやローマまでの経緯にスペイン語とイタリア語の通訳者とし関わったのが、学者であり作家のシュビオーネ・アマールティであった。

アマールティは有名な『使節記』をイタリア語で残している。

私はその『使節記』をイタリア美術史学者の尾形希和子氏の助けを借りて翻訳を試みている。全体が三十一章で構成されているが、その九章に「伊達王がどのようにして偶像崇拜の寺院を破壊させるように命令したか」と題した瑞巖寺の記述がある。

その内容は事実に対し異状なまでの陰惨な政宗の仏教迫害で終止している。瑞巖寺は平安時代初期に建立された天台宗の寺で「延福寺」と称していたが、鎌倉幕府執権五代の北条時頼に武力で滅せられた。そのさい時頼は三浦小次郎義成の軍を松島に送り、天台僧は追放され、経巻は経ヶ島で焼かれた。替わって禅宗の一派の臨済宗となったが、その背景に凄惨な争いがあった。

政宗が慶長九年に自ら謁張りをして、熊野の材と京都の名工を呼んで今の姿にし、保護した。しかし不思議なことに、この寺に政宗は完成後には二度しか訪れていない(元和七年と死の直前の寛永十三年)。

その上丁度ソテロ神父がここを訪れた頃は、奇しくも住職不在の時期に重なる。慶長十六年に初代住職虎哉と三代の海晏道陸が死んでから瑞巖寺は五年後の元和二年まで住職不在であった。それらを勘案して私は、アマールティは北条時頼の武力制圧の話と政宗の仏教迫害としてすり替えたのだと見ている。サント・インガルノ(聖なる偽り)として布教史によくみられる例で、日本布教史で有名なルイス・フロイスの著書にもしばしばこんな例が現れる。

当時よく使われた格好のサント・インガルノなので、その内容をそのまま紹介する。

第九章

王(伊達)があらかじめ慎重な決心をもって、この神聖な事業を続けるように天から導かれ、また神の法が人々の心の中に刻まれるだろうという王が抱いた明白な意思と神聖な意図を表明した後、宮廷から一五ミリーヤ離れた、建物の荘厳さと快適な場所では他の最も壮麗な都市のうちの一つである仙台の町に、気晴らしに行った。

(訳者注：王(政宗)の宮殿と仙台との距離は十五ミリーヤ(三十数キロ)離れていたことを意味する。ここでの宮殿は玉造郡の旧政宗の城「岩出山城」を指すのか?)

ここは重要部分なので直訳的に訳出した。また大変多くの数の鱒が採れる川に着き(広瀬川か)、王が秩序だてて命じられた漁をし、その道すがらの途中で、わが国のカタルーニアのモンセラートの聖母聖堂やマルカ・デ・アンコーナのロレット聖母聖堂のような日本の七名刹の一つである大松島を見学する機会を得た。そこには無数の巡礼者らが神々の恩恵を得、罪の許しを願うために、~~買~~買ってやってくるのである。

それは多くの仏教僧と、過ちの異教徒が造った無数の石像、多くの儀式、偶像崇拜が継続して産まれた崇拜の形などで紛うことなき大なる容積の装飾と富める本山である。そして巡礼者は魔力を持って心奪われる仏像にうやうやしく意思と尊敬を持って接しなければ、罰があたるといわれている。それで巡礼者たちは恐れおののきを増し、儀式を正確に遵守して行うことを、お互い怠らなかつた。

王は理想的な創造物が何も無い所へ、世界を産みだした永久なる被創造物に対しての尊敬が、むしろ聾啞で盲目の偶像に対して行われていること、そして悪魔が日本の魂に打ち勝つを見て憤慨した。そしてこの悪魔の根深い宗派を破壊してくれるようにと、そしてこの神聖なる事業の中で、それがフアラオの神であるということを示してくれるように、と大きな声で神に呼びかけた。そして恐れを知らぬ大胆さで聖なる情熱に燃え、恐れを捨て、過去何世紀もの間仏に対して抱いていた尊敬も捨て、本来ならば護衛と戦争の兵役に就く筈であった極めて数多くの人々に、反抗したり(原文：怒役忌避することなく)命令に従うこと

を嫌うならば、不敬罪の罪に問うといって、首を切り落とし、体を襲い、すべての種類の打撃とのしり難言を浴びせて、阿弥陀や釈迦を燃やし、神や仏を非難して、本山(崇拜の場所)の神聖を汚し、偶像を侮辱し、祭壇を汚すようにと指示をした。

日本を何世紀もの間欺いてきたが、もしもできるなら侮辱から解放され彼等の体の蹂躪や極度の衰弱にたいして復讐することになるのだとのしりしながら、千八百年の間常に崇拜されてきた、本山の周りに置かれた八百体の石の偶像すべてと、いくつかの並外れた大きさの偶像にたいする尊敬が失われたので、その一部は海に、またその一部は川に、そしてまた一部は地上に捨てられた。「クリスチャンの神、万歳。日本全ての神々のうえに力強くあれ」と大きな歓呼の声で叫びながら。

その本山の破壊に大胆にも立ち会った人々は、まるでそれらの同じ彫像のように、仏たちが価値がなく罪や破壊の過酷な厳しさによって復讐されなければいいとまだ崇拜していたのだが、これらの多くの悪魔の大虐殺が行われ、王は信仰の盾をもって勝ち誇り得意満面で、自分自身でおこなつ

た彼の神のきわめて偉大なる奇跡を確認し、偶像の大崩落の跡と、寺院の破壊と、悪魔の逃亡の姿を見にくるよう神父に頼んだ。

その王の命令は果たされ、神父は、地に散らばる数限りない彫像の破片を見、人々が王の力は阿弥陀や釈迦の神格よりも大きくて、王は真のクリスチャンの、地獄の全ての力や悪魔に対しての神の名のもとすべての支配をもっていた神を認知している、と告白するのを神父は見えた。

それに対して非常に喜んだ神父はかれらの様子を信仰の中に確認し、また王の勅令の遵守の中に確認し、彼らが別の生の確かな歩みを知りたいと表現したので彼らをキリスト教の教義の規律に服させることを約束した。彼が王のもとから帰ってきて確認したことを(原文：大変に保証的な)報告したので、皆は勝利を祝い、彼自身のために親切にし、王の魂の中のキリスト教の神聖なる信仰の真実を本物であると確信し、神に対して限らない感謝をささげた。また別の時、大変に有名な教会の中で仏教僧たちに同じことをやり、偶像に対する崇拜を排することを拒否せんと命令する僧に対して、怒った王はその場所を僧たちとともに燃や

してしまふように命令した。この命令の遂行者は、このドン・フィリップ・支倉であった。彼は四千人の火繩銃兵の王の護衛隊の隊長であったので場所は燃やさせたが、仏教僧たちに同情したので、火の中で生きながらに焼かれてしまわぬよう首を切らせた。

ある老僧が、王がそれを得てそれを敬つてくれるように贖罪の札をもつて王に面会したが、王は彼にその札を頭の上の置くように命令し、矛槍を持った兵にそれをめがけて打たせ、大きな石を上から投じて、脳髓に札ごとめり込ませた。これにより主要な貴族たちは我らが聖なる法を信じ、洗礼を受けるように動かされたのであった。

以上で第九章は終わる。意図して直訳的に記されたままに訳出してみた。
アマーティの『使節記』は、支倉がローマに滞在中の一六一五年に公刊されていて、数か月の内に第二版がでてゐる。当時のベストセラーだった。このような形で瑞巖寺がイタリヤに紹介されたことは、なんとも奇妙な縁であつたと私は思っている。

祝出版

※三戸岡道夫著

『米山梅吉の一生』

栄光出版社

『関口隆吉の一生』

静岡新聞社

※相原精次

三橋 浩 共著

『関東古墳散歩』

増補改訂版
彩流社

※瀧澤

中著

『日本で一番不況に強い男』

中経出版

※『八事』No.25

特集「記憶」

正木清幸著

〈雲南・北ビルマ戦線の記憶〉

中京大学

※『歴史読本』

八月号

柴田弘武著

〈産鉄の民をめぐる論点〉

新人物往来社

事務局だより

※お願い

エッセイ集の原稿は彩流社に提出しました。九月下旬ごろから初校が出はじめる予定です。著者紹介欄のための左記事項を記載の上、例会日に必ず提出してください。

氏名(ふりがな)

①生年月 ②簡単な経歴 ③主な著書二冊(出版社名) ④興味あるテーマ

1行23字 ①④までを5行で。

※7月は後期会費の納入月です。

※8月は夏休み。9月の例会は第5週の30日です。お間違えのないようご注意下さい。

※後半の例会担当者が発表になりました。

9月 講演 鍋屋次郎氏 原稿〆切9/30

10月 講演 隆 恵氏 原稿〆切 10/31

11月 討論 題未定 報告〆切 12/31

12月2日 忘年会

執筆〆切 11/30 「今年感動した本」

執筆〆切 11/30 「今年感動した本」

執筆〆切 11/30 「今年感動した本」

執筆〆切 11/30 「今年感動した本」